

薬剤耐性イネばか苗病菌の発生について

令和4年5～8月に、県内のイネ栽培圃場でばか苗病菌を採集し、薬剤に対する感受性を寒天培地上で検定した結果、プロクロラズ（スポルタクスターナSE等の一成分）及びペフラゾエート（モミガードCドライフロアブル、ヘルシードTフロアブル等の一成分）に対する感受性の低下が確認されました。また、感受性の低下が認められた菌株に対する種子消毒剤の防除効果を検証した結果、プロクロラズ剤及び一部のペフラゾエート剤の防除効果の低下事例が確認されました。

1 県内における薬剤耐性菌の発生状況

- （1）県内（9市2町）のイネばか苗病の罹病苗（茎）から採集した100菌株を用いて、寒天平板希釈法により、薬剤感受性を検定した結果、プロクロラズの耐性菌発生圃場率は60%、ペフラゾエートの耐性菌発生圃場率は30%となり、県内広域で耐性菌の発生が確認された。一方で、イプコナゾール（テクリードCフロアブルの一成分）の耐性菌の発生は確認されていない（図1）。
- （2）感受性低下が認められた菌株を用いて、種子消毒剤の防除効果を検証した結果、プロクロラズ剤及び一部のペフラゾエート剤の防除効果の低下事例が確認された。

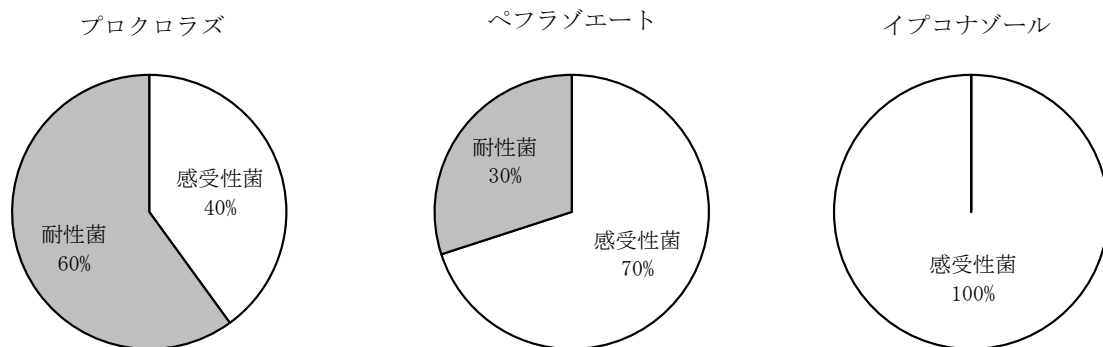


図1 県内の薬剤耐性イネばか苗病菌の発生状況

注) 令和4年度に県内9市2町の20圃場から採取した100菌株を用いた、寒天平板希釈法による検定結果から判断した

2 防除対策及び防除上の参考事項

- （1）県内では、これまでにベノミル（ベンレート水和剤等の一成分）及びトリフルミゾール（トリフミン水和剤等の一成分）に対する耐性菌の発生が確認されている。
- （2）プロクロラズ剤及びペフラゾエート剤を用いても発生が見られる圃場では、イプコナゾール剤を用いて消毒を行う。
- （3）種子消毒剤を使用する際は、薬液が種子に十分付着するよう用法・用量を遵守する。
- （4）作業場や資材の消毒、種子更新、塩水選、温湯消毒や浸種中の適切な温度管理、本田での罹病株の抜き取り等を組み合わせた総合的な対策が重要である。



図1 イネばか苗病の徒長症状（育苗箱）



図2 イネばか苗病の徒長症状（本圃）



図3 イネばか苗病による枯死茎

農薬の使用に当たっては農薬使用基準を厳守するとともに、農薬飛散に注意するなど、安全・適正に使用するようお願いします。

この情報は、岡山県病害虫防除所ホームページでも公開しています。
アドレスは、<http://www.pref.okayama.jp/soshiki/239/> です。

